

令和7年度第1回白井市総合計画審議会
議事概要

日 時：令和7年5月30日（金）14時から16時30分まで

場 所：白井市役所本庁舎2階災害対策室2・3

出席者：【委員】

関谷昇会長、手塚崇子副会長、松浦健治郎委員、成田秀雄委員、中野七生委員、
中村教雄委員、林陽子委員、佐野由加里委員、

【事務局】

板橋企画財政部長、村越企画政策課長、齋藤係長、飯田主任主事
傍聴者 2名

1 開会

2 議題

（1）前期基本計画素案について

○会長 議題1について、事務局から説明をお願いします。

○事務局 **【資料1】3. 目指すまちの実現に向けた施策の柱と施策のうち「1 若い世代が定住したいまち」「2 誰もが交流し支え合えるまち」（P.Ⅲ-3～Ⅲ-15）を説明**

○会長 ありがとうございました。

6つの目指すまちのうち、初めの一つ目と二つ目について説明をいただきました。柱については、既に確認をいただいていますので、それを踏まえた上で、柱にそれぞれ施策がぶら下がっていると。さらに、主だった取組内容についても、併せて御紹介をいただいたところです。

まず、この二つの柱について、御質問、御意見ありましたらお願いをしたいと思います。あと、それぞれの施策のところに施策目標の指標、それについても併せて説明をいただきましたので、そういった指標を加えていくということでもいいかどうか。これは、ほかにももっとこういった指標があり得るんじゃないかといったような御意見がありましたら、それも併せて御指摘をいただければと思います。

どうぞ。

○委員 ちょっと確認させていただきたいことがあるのです。若い世代が定住したいまち、ライフイベントを安心して迎えられるまちということで、これ今回じゃなくて、前回に気づくべきだったのですが、前回終わった後で、住民の皆さんのアンケートとかをもうちょ

っと詳しく、細かく読んでみたのです。私の不勉強だったのですが、安心して子育て、安心して結婚して子供を生んで、出産、子育てとあるのですけれども、白井には産婦人科がないのです。私、今まで産婦人科とかがないところに住んだことがなかったので、本当に気がつかなくて。当然あるものだというふうに思っていたのです。

恐らく私の調べた中では、小児科もないのではないかと思いますのですが、それはすごく大事なことです。何も触れられていなくて。ただし、アンケートの中では、やはりその辺の指摘があつて、私も個人的に調べていて、ないのだと思って。

産院というものは、自分で求めて、ここの施設がいいのでと遠いところに行く場合もあり得ますけれども、何かあったときに、すぐに向かえる。乳児健診も、保健所とか何とかだけじゃなくて、すぐに産婦人科に向かわれて、また、それと連携する小児科に向かえるということが、これをなくして安心して出産、子育てというのが、本当に早く、もっともっと最初の段階で申し上げるべきだなと思っていたのですが、これについては、今後の御計画であるとか、それについては、どのように考えられて、また、全くその記載がないのですが、どのように考えられているのかということを確認したいと思うのですが。よろしくお願いいたします。

○事務局 ありがとうございます。

おっしゃるとおりでして、白井市、これまでは産婦人科あったのです。あったのですが、先生が御高齢になって、やめてしまわれたといった経緯がありまして。なので、隣の印西市とか鎌ヶ谷市駅前にあるのですけれども、そういったところに行っていたというものが実情としてあります。

やっぱり産婦人科医自体が減っていく中、取り合いになっているといった中で、本当であれば、次の産婦人科が誕生してみたいなのがベストだと思うのですけれども、実情として、ないというところがありまして。

ただ、こちらの計画については、細かい事業チックなことを書く部分ではなくて、例えば、安心して暮らしたいな目標を掲げて、それに対して、この下にぶら下がっている事業のほうで、そういった例えば産婦人科の誘致ですとか、そういったものについて取り組んでいくといったものとなります。

こちら中心都市拠点・生活拠点づくり事業というのは、基本構想に掲げた中心都市拠点、丸で囲っていますけれども、そういったものも再開発のときに、こういった若い世代が安心できる要素の一つとして、産婦人科欲しいよねとか、そういったものはあるのかなと思いますので、そういったことは当然視野に入れて、事業の推進をしていければなというふうなところです。

○会長 そちら辺、多分いろいろな言い方があり得ると思うのですけれども、千葉県、基本的に医師不足、看護師不足ということが言われていて、これ九十九里のほうとかいったら、産婦人科医、小児科医どころか、救急車を呼んでも、なかなかすぐに来てもらえない

というふうな状況が場合によってはあったりするので、そういう意味で、非常に医療過疎地だなんていうふうに言われることもしばしばですけれども、そういう状況がある中で、例えば、市として産婦人科医を確保しにいくということは、お考えなのですか。

というのは、考え方がいろいろあって、例えば、白井市で確保しなければいけないという見方がありますけれども、もう少し、こういった状況ですので広域的に考えて、近隣市町村含めて、ある程度対応できるような環境にあるのであれば、その後、環境をどういうふうにしていくのかというふうな、また一つの視点もあり得るところなので、単独で集めにいくというふうなことをお考えなのかどうか。それも併せて補足していただければと思います。

○事務局 まず、会長の御意見のとおり、市として、市単独で産科医、小児科医というのは、集められることにはこしたことはないと思います。ないと思いますけれども、現実、誘致したところで対応できるかというところも、未知数な部分がございます。

おっしゃるとおり、広域という視点では、連携ということで近隣の市町村と連携して取り組む。例えば、病児・病後児保育なんかは、隣の鎌ヶ谷さんと協力しながらやっているという取組がございます。今、既にやっているものがあって、それ以外でも、医療の分野でも、今、群の医師会とかございますので、その中で協力的な動きというのは行われているということは聞いていますけれども、そこがどのジャンルまでなっているかというのは、申し訳ございません、今の段階、私どもは把握できていないので、明確な答えはできないのですが、確かにそういう動きが見えているところはあります。そういうところで、もし可能であるならば、産婦人科や小児科医とかそういうものについても、提案というか、そういうことで進めていければとは思っています。

○会長 それは、今日どういうふうな形でというのは、なかなかできないところもあるでしょうけれども、そういう指摘があったということは、また今後の作業の中に少し位置づけていただければというのと。今、御指摘あったように、例えば、小児救急の夜間対応だったら、印旛郡市という枠組みで今やっていますよね。だから、そういったことももちろん含めたネットワークがある部分はありますので、そういったあたりも含めて、今後の作業の中で、少しその辺も位置づけていただけたらというふうに思います。

ほかにいかがでしょうか。

どうぞ。今に関連すること。続けて、どうぞ。

○委員 いろいろ事情は、もちろん今、日本を取り巻く医療の状況とかも十分把握しておりますし、その中で、産婦人科医、小児科医というのは、なかなか成り手がいないというふうなものも医学部の問題でありますので、それも十分知ってはいたのですが。

ただ、掲げているのが、安心してというのがあるじゃないですか。恐らく、ここにずっと、この印旛郡というのかしら、千葉ニュータウンとか、この周辺にずっと住んでいらっしゃる方だったら、それが当たり前だと思っているのか分からないのですが、例え

ば、新しい方たちを呼び込むというときに、これは、かなり知ったらびっくりしますよ。幾ら住宅がリーズナブルに手に入るとしても、やっぱりその辺のハードルは高くなると思うので、今、指摘してお答えになるのではなくて、やはり姿勢として、そういう自分たちのデメリットというものを十分把握して、どのようにアピールしていくか、新住民に。ということをお考えになってほしいと思います。

○事務局 ありがとうございます。

確かに、今ここでそういうお答えをさせていただきましたけれども、産科医がないということは、十分市にとって、大きな痛手という、ちょっと表現があれですけども、重々承知しています。

ただ、市として、産科医を誘致するとかって、なかなか簡単ではないということもありますので、こういう行政計画上に位置づけることは、当然できることを目標にしてやるので、それが引込みということは確かにあるのですけれども、その辺を整理しながら、今後、おっしゃるとおり、十分大きな課題であるとは認識していますので、その辺は何かしら、広い意味で取りかかっていきたいとは思っています。

○会長 どうぞ。

○副会長 施策の1-2-2、育児と仕事が両立できるような働きやすい環境づくりの推進のところで、施策目標が、待機児童ということが述べられているのですけれども、もちろん両立できるためには、保育園と学童保育の待機児童というのはすごく大事なのですけれども、近年は、前に比べて大分待機児童問題というのは減ってきていて、今、課題は待機児童ではないんじゃないかと私は思っていて。この第5次総合計画が5年ですよ。ということを考えると、先のことを見通すとなると、課題なのは、やっぱり発達に課題があるお子さんが通う場所です。発達に課題があるお子さんが通う場所というのは、今、下の発達センターとかもおありになると思うのですけれども、時間が決まっていて、保護者の方が仕事を休むか、就労形態を変えなければ難しいという状態が出ていると思うのです。

例えば、こちらの横長のほうの施策体系図のところの5ページを見ていくと、インクルーシブ教育・保育施設移行推進事業というのを掲げられていて、児童発達支援事業所を保育園に併設すればいいんじゃないかということを書いてあって、私も、そちらのほうの会議にはずっとさせていただいているのですけれども、保育園に併設することで、保護者の方は、通常の保育園の送り迎えをすれば、子供は療育を受けられるというのは非常に大事で、親が就労をやめざるを得ないというのと、経済的な不安というのも出てきて、それが一番、育児と仕事が両立できるというところに結びつくんじゃないかなというふうに考えられるのではないかと思います。この待機児童、保育園と学童保育の待機児童だけでは、この先考えたら、これはもう今の課題ではなくなっているのではないかと考えるので、もう少し児童発達支援事業所などが保育園に併設などの、そちらも含めて、こちらに記載していただくことが、本当の意味での働きやすい、仕事と育児が両立できることになるの

ではないかと。

児童発達支援事業所の在り方とかいうのも見直すことによって、働きやすい環境づくり、働きやすいだけじゃなくて、経済的にも安定しているということで、保護者や子供をめぐる環境を安定させることにつながるというふうに考えると思いますので、その辺もできれば加えていただくと、今後のビジョンとしては、的確に適正なものになるのではないかなと思うのですけれども、いかがでしょうか。

今働いているものをやめたり、パートにせざるを得ないというのは、経済的不安、それが子供にも影響を及ぼすというふうに考えるので、その辺をどうやって白井でやっていくのかというのは、とても重要かと考えておりますが、いかがでしょうか。

○事務局 1点御確認したいのですけれども、こちらの施策の目標として、保育園待機児童数というのを書いてあるのですけれども、こちらの指標が、今のこれからの時代を考えると、ちょっとそぐわない。

○副会長 これだけではそぐわないというか、待機児童になったほうが育休延ばせるというような人も今すごく出ている時代なので、もちろん待機児童も大事で、それよりも先のことが課題に出てくるはずだという認識を私のほうでしているものですから、この二つの待機児童の数で、働きやすい環境ということではないのではないかとということです。

最近、やっぱり発達に課題あるお子さん、とても増えているので、その子を育てていくということを支援すること、すごく大事だと思いますし、働き方というのは、経済的安定、心の安定につながっていくと思いますので、それも、できれば入れていただいたらどうかという御提案です。

○事務局 ありがとうございます。

先ほど出たインクルーシブ教育の観点で、児童発達支援事業所、そういったものは、目標2の施策1のほうの線引きのない教育保育の推進、こちらはもう別の施策として体系させておりまして、そちらのほうで推進しつつ、施策の2として、こういったものを掲げているといった整備を今しているところなのですけれども、今、頂いた御意見を踏まえまして、再度どういった、時代に合った目標値を立てるかとか、そういったものを整理していきたいと考えています。

○副会長 よろしく願います。

○会長 非常に大事な御指摘だと思うのですけれども、これ保育という点もそれですけれども、小学校に入ってから、そうなのです。例えば、支援学級のようなところでいくと、今、とにかく張りつけられる教員がいなくてということで非常に困っているというところですし、もっと言っちゃうと、グレーゾーンなのです。例えば、発達障害というふうに完全にくられるお子さんと、そうじゃない部分、グレーの部分というのがあって、その辺も含めていくと、やっぱりそれなりの人数も要るし、それなりの対応環境というのをつくっていかないと、こっちだあっちだというふうな、単なる二者択一ではできないような実情

というのが、小学校の教育現場だとかなりあるのです。それも含めて、ぜひ間をつなぐという部分を、切れ目のないというのもそういう発想なわけですがけれども、それらを意識されるといいのかなというふうに思います。

○副会長 ありがとうございます。

今話を伺って、例えば、柏市なんかですと、支援学級がすごく増えていて、そこで働く先生がすごく少なくても困っていると。人口は少ないように感じるのですがけれども、支援学級に通う子供が多いということは、それだけケアも必要になってくるということなので、こちらの市では、白井さんでは、支援学級が増えているとか、対象となるお子さんが増えているとか、そういうことはおありになるのでしょうか。

○委員 大山口小学校は教室を二つ借りているのです。それ実はサポート学級の中にあって、10年以上ずっと借りているので、いつもお友達なのですがけれども、この4月からサポート学級が増えました。先生の数も多分、増えていて、駐車場がいっぱいになったということもあります。多分、今までは隠していたりしていた子供たちが今、オープンになってきているのだと思います。

○事務局 ありがとうございます。

おっしゃるとおり、グレーゾーンとか、そういう部分の方々が確かに多くなっている。本当おっしゃるとおりで、隠しているというか、表に出てこなかったものがちゃんと表に出て、しっかり対応するというような時代でもありますので、今、委員がおっしゃったとおり、学校で増えているところもある。

それから、実際にお子さんというか、児童の方も傾向としては増えていると思います。すいません、数は今手元にないので、どのぐらいということはお話しできないのですがけれども、現状としては、同じ増えているというような状況があるかと思います。

○副会長 ありがとうございます。

それも踏まえていただけるとありがたいなと思います。ありがとうございます。

○会長 どうぞ。

○委員 私も小学校、中学校のPTAとか、その世代の親御さんや子供たちの声を聞いていますと、そういった特性のあるお子さんをお持ちの親御さんが安心してというふうな部分のみならず、やっぱり今おっしゃったグレーゾーンの子供たちがすごく増えていたりすると、いわゆる普通学級のほうにも、そういうお子さんたちがいると、やっぱり先生方の手が足りていないと、学級崩壊と言っちゃオーバーですがけれども、授業中に私語ばかりで、クラスがわちゃわちゃしちやって、普通のというんじゃないですがけれども、勉強したいのに、うるさい子がいて勉強に集中できない、先生も困っているというふうな声は聞こえてきちゃうのです。そういうふうな声がぼつぼつあったりすると、あそこの小学校はああなのでしょう、あそこの中学校はああなのでしょう、白井の小学校、中学校はああなのでしょうという話になってしまって、特性のあるなしにかかわらず、子育て世代の保護者が、

もっとそういうのが整ったところとか、だったら最初から私立の小中学校がある街にというふうになってしまうくらいがあると思うので、本当に特性のある親御さんだけでなく、全ての親御さんにとって、あと、白井に住み続ける、白井に住もうかなと考えていらっしゃる方にとって大きなテーマだなというふうに認識していますので。

やっぱり先生方、ハードですね。働き方改革もあり、非常にハードなお仕事や労働を強いられている中で、やっぱり人手不足、教員の成り手不足というのがとなえられている中で拡充するというのは、市の努力だけじゃなくて、実際、教育委員会は市ですけども、職員は県だったりもするので、幅広く連携しての取組になるのだとは思いますが、ぜひ、お願いしたいなとは思っています。

○会長 ほかにいかがでしょうか。どうぞ。

○委員 最初の目標 1－1 のライフイベントを安心して迎えられるまちの最初の若い世代に向けた住環境の整備のところ、図のほうの新築の着工戸数が、白井市は少ない。だから増やす、みたいな、何かそんなような話があったのですが、僕、とても違和感があって。私、建築とか住宅の専門なんで、ちょっと言わせていただきたいのですが、多分これからも住宅ストックは余っている時代ですね。例えば、白井も戸建て住宅がかなりあったりとか、そこに例えば、お年寄りの方が住まわれて、子供も独立されて結構広い。そこで例えば、街中のマンション、少し狭い 50 平米ぐらいに住み替えるとか、そういう居住の循環システムみたいなのをうまくつくってあげれば、そういう戸建てが、高齢者の方が移って、そこに若い人が住むとか、若い世代向けだけでなく、周囲のちゃんと居住システムの循環的なシステムをつくっていくみたいな、そういう施策にさせていただいたほうがいいんじゃないかなという。

だから、新しい住宅をどんどん造っても、それは S D G s 的にちょっとまずい。住宅がどんどん余っていつける時代なのに。だから、すごく時代錯誤的な感じがしたのですが、いかがでしょうか。

○事務局 ありがとうございます。

御指摘していただいたことは、もっともだと思います。これから日本全体が少子高齢化で人口が減っていく中で、新たな住居というのは、本当によいのかとか、そういった部分は当然あると思います。白井市の若い世代の定住に向けた強みとは、やっぱり千葉ニュータウン開発であるといった、子育てしやすい環境ですとか、そういったものが強みなのではないかと考えているところなのです。

ただ、そこが、ニュータウン開発から 40 年たって、住居の受け皿が不足しているといったところで、そういったいい環境の中で新しい住居を増やすと。決して、家をたくさんば一つと、どこでもいいから住宅施策をとるとか、そういった観点は違うかなというふうには考えているところです。

また、今、御提案いただいた市内転居を促すような、そういった視点は今、アイデアを

頂けたことは、とてもいいアイデアだなと思いますので、検討させていただければと思います。

○委員 多分、最初、私は全ての人が住み続けたいような街がいいんじゃないかという話をしたら、若い人だみたいなので、そうなったというふうに認識しているのですけれども。さっきの循環システムというのは、まさしく高齢者の方も住み続けられるという、そういう意味で、そういうライフステージに合った住宅を住み替えていって、ずっと白井に住めるような、そういった街になるのはとてもいいんじゃないかなと僕は思っているのです。そういう意味で、総合的に住宅政策を考えなきゃいけないんじゃないかというのが私の指摘です。

○会長 どうぞ。

○委員 これ、前回の会議で、白井は新築の着工戸数がほかより少ないという部分で、ほかの自治体と比較してどうするかという部分で、新築も重要な観点の一つ、新築で新しいライフステージを始められたい方も一定数いると思うので、これはこれで重要だと思うのですけれども。

私が違和感を感じたのは、これはこれで間違いなくテーマの一つだと思うのですが、この6つのまちのうちの新築戸数のこの図は、1の若い世代が定住したいまちの施策や目標は、基本的にソフト面じゃないですか。なので、僕、この新築戸数の表で、4の白井らしい環境を生かすまちに、この資料というか、この表はあったほうが、しっくりきたなというふうに思っていますのと。実際、このⅢ-25 ページには、ニュータウンの再生に向けての部分で、新築戸数を施策目標に挙げていたり、なおかつ、今、委員のおっしゃっていた空き家の市場への流通支援についても、きちんと研究されているところがあるので、この住宅政策に関しては、この4のところで述べられているということで、1の町の部分については、どちらかというソフト面での施策なので、新築がほかより少ないよという表のこの図は、4のほうにあったほうが整理されて分かりやすいかなと感じました。

○事務局 ありがとうございます。御指摘いただいたことを踏まえて、検討、整理したいと思っています。ありがとうございます。

○会長 住環境、どんどん分野またがるので、どう掲載するかということにもなるかと思うのですけれども。でも、今、御指摘いただいたことは、僕ももつともかなというふうには思います。

ほかにはいかがでしょうか。ほかにはよろしいでしょうか。

一つ、Ⅲ-14 のところにあった、この小学校区まちづくり協議会の委員の話ですけれども、少しまち協の現状というか、今後に向けて、もし一言あれば、ぜひ。

○委員 ちょうど、最初の3か年計画があって、次の3か年計画がスタートして、それでいろいろ順調に動き出したというところが正直な感想です。

例えば、夏祭りにしても、何を目的にしていたかということ、若い人たちのふるさとな

ってほしいということが目的だったのですけれども、案ずるより産むが易しで、一昨年ぐらいからコロナ禍でできなかったのですけれども、コロナが終わって、その次のあたりから、のど自慢でほんの数人しか手挙げた人いなかったのですけれども、それが終わってから、中学生、高校生がどんどんマイクを取って、どんどん歌ってくれるのです。こちらはただサポートしていればいいというので、昨年も大いに盛り上がってしまして。駐車場にいた市民活動支援課の人も、何か盛り上がっているねと、これだけ聞こえるねという感じで、結構そういうのは、よくなってきたのだと思っています。

それから、自治会は、どうしても毎年、人が変わったりして、なかなかメンバーも固定しないし、成り手がどんどん減ってきているのです、はたから見ても。それをちょっと広い小学校区にすれば、私みたいな人も多分いるだろうということで、まちづくり協議会でしたらば、いろいろなイベントができる。これが、もしも自治会単位でしたらば、恐らくできないだろうなというイベントもたくさんあると思います。

○会長 今、設立されているところは、今お話しいただいたように、着実に横の連携というものを深めていると思いますし、今、清水口でしたっけ、準備。

○事務局 今年から。

○会長 ですよ。なので、それもまた期待を寄せられるところかなと。

もうちょっと長いスパンで見ると、今はとにかくいろいろな活動団体が横に連携していく、そういう意味での基盤づくりということをやられていますけれども、例えば、地域自治という視点からすると、多分もっと自治力強化というのが、私の読みだと次のステージ、フェーズで問われてくる。

これは要するに、その地域住民の方々が、まさに自分たちで地域というものを担っていくという部分の、ソフト的な連携もそうだけれども、多分、もっと物的な基盤、例えば、リタイアされた方々が協議会というハブ機能を使いながら、そこで新たなまた活動をつくり出していくとか、あるいは、新たな起業をしていくだとか。要するに、例えば、そういうリタイアされた方もそうだし、いろいろな専門技術を持った方々がネットワークを組んで、その地域での預かり合いみたいなものをつくっていくだとか、そういういろいろな仕事をつくり出していくという部分も、まち協には期待されている大事なハブ機能なのです。

今は、例えば学校で言うと、部活動を地域にどんどん出していくという流れも出てきていると。そうすると、部活動というのをこれまた地域ベースでやっていく。今、民間企業が参入して、それを受けていくというパターンが多いですけれども、そういったものだけじゃなくて、地域住民がそれぞれ持っている特性というものを生かしながら、子供たちが学校の中だけじゃなくて、地域で活動できるというふうな、そういう環境を、これまたまち協がハブ機能として各方面につないでいくと、そういう広がりにも多分、今後していかなきゃいけない取組だと思いますので、そういう視点で、ぜひ、この辺も位置づけておいていただけたらなというふうには思います。

ほかにはよろしいでしょうか。この二つについて。もし何かあれば、また後ほど御指摘いただければと思いますので。

続いて、三つ目と四つ目ですね。まず説明のほうをお願いいたします。

○事務局 **【資料1】3. 目指すまちの実現に向けた施策の柱と施策のうち「3 自ら学び育ちチャレンジできるまち」「4 白井らしい環境を活かすまち」(P. Ⅲ-16～Ⅲ-26)を説明**

○会長 ありがとうございます。

今、三つ目の自ら学び育ちチャレンジできるまちと、それから四つ目ですね。白井らしい環境を活かすまちということで説明をいただきましたけれども、先ほどと同じように、お気づきの点ありましたら、御質問、御意見お願いしたいと思います。

○委員 資料2の10ページの取組の指標のところ、さっきのにつながりますけれども、市街化区域の新築戸数というので、やっぱり新築増やせという指標になっていて、これはちょっと違うだろうということで。多分だから、この空き家の市場への流通支援とか、マンション等の老朽化に対する支援と書いてあるので、それがちゃんと客観的に分かるような指標を用意すべきなんじゃないですか。

○事務局 ありがとうございます。

こちらの事業では、空き家の市場への流通支援とか、そういった視点も入っていますので、これに対する指標として、新築戸数だけでは、ちょっとずれがあるので、再度検討させていただければと思います。

○会長 この資料の2の10ページのところに、今、御指摘いただいた新築戸数もそうですし、ニュータウンの再生に向けた住環境の整備という、このニュータウンの再生に向けたというのが、よく分からないのです。

これ前から申し上げていますが、ポストニュータウンということが今、考えられていると。つまり、開発というものが一段落して、今後、成熟に向けたプロセスを考えて。印西はまた、もうちょっと向こうのほうに、どんどんという話もあるのでしようけれども、白井としては、今後、このニュータウン地域に新たなものを建てていくという話には間違いなくならないという状況の中で、どうしていくのかということが、まず根本的なところで問われているわけですね。

だから、その中で、こういう新築というふうなものは、少しずれているんじゃないかというのは全く御指摘のとおりで。だからこそ、先ほどおっしゃったように、世代の入れ替わりとか、市場へのまた新たな価値づけみたいなものをどういうふうに膨らませていくのかということは、まさにポストニュータウン的な発想の中で捉えられるものだと思うのですけれども。

もうちょっとアドバイスを頂きたいのが、要するにポストニュータウンということで、

なかなかトータルのイメージというのは膨らんでいないところもあると思うのですけれども、この辺、特に、こういう白井のような環境の中で、こういった方向性が問われているのかというのをちょっとお願いできれば。

○委員 例えば、佐倉のユーカリが丘とかだと、山万というところが、そういうトータルなマネジメントをやられていて。それは住宅だけではなくて、福祉も含めてトータルで街をどういうふうにしていくのか、循環的にどういうふうにならずに住み続けられるようにするかということを考えられてマネジメントされていますよね。

だから、そういったことを、前にちょっと言ったかもしれないです。自治体やるのか、それとも、どこか民間の団体がやられるのかというのはあるのですけれども、そういうトータルなマネジメントをちゃんとやっていかないと、住み続ける街としては選択されないんじゃないかというのが私の意見です。居住のシステムを含めてですけれども。

○会長 なかなか、じゃ、どうするかというのは難しいところもありますけれども、間違いなくそこを通っていかないと、なかなかその可能性ということにつながっていかないといいところもありますので。施策を立てる、あるいは指標立てるという部分においても、今出たようなことを少しあぶり出せるような指標をぜひ加えていただけたらなというふうに思います。

ほかにいかがでしょうか。

どうぞ。

○委員 提案というか、2点あるのですけれども。今のまちづくり、このニュータウンをどうしていくかというのに、すごく今お話しになっていることに賛同して。私もずっと、この新築戸数というのに、実は最初に読んだときに、とても違和感があったのです。

ただ、一つ、今のお話合いの中で分かったのは、これは一つ、ここの白井の皆さんに選んでいただける目玉になるかもしれないなと思ったのです。

というのは、やはりリニューアルというんじゃないのですけれども、もっと全体を俯瞰して、正直言って、きれいな計画とは言えないのです。白井でも、桜台とかのほうに行くと、電柱も地下に埋設してあって、きれいだな、並木道もきれいだなと思うことあるのですけれども、白井、西白井は、まず灰色の光沢の建物とか、それだから、いかに作り変えて、ハード面だけではなくて、いろいろなことに循環させるという意味で、これは一つ目玉になるなと逆に思います。

それは別にして、私がちょっと感じたことで、自ら学びチャレンジできるまちということだったのですけれども、いろいろありますよね。子供たちに職業体験ですとか、いろいろなまちづくりに、子供たちといろいろな話合いですかね。いろいろなことを通じてまちづくりなど生かしていく。これって結構ハードル高いなと。こんなに盛り込んで大丈夫かな。自ら学び育ちチャレンジできるまち事業動態ですね、9ページの。これって盛り込み過ぎではないだろうか。

専門というのは、アイデアを実践し、新たな挑戦提案事業。そこを見抜くといえますか、そういう能力のある方がいて、初めてこれは、子供のアイデアはすごいとか、アドベンチャー事業にしても、これを将来につなげられるなど。かなりの専門家じゃないと無理なのです。中途半端と私は思います。中途半端な方が指導して、それは本当にまちづくりの根幹をなすものではなくて、例えば、いろいろな地域にこういう専門家が住んでいて、ちょっと子供たちと一緒に交流しようというぐらいだと、まだいいのですけれども、これをまちづくりとか将来の計画につなげるなんていうのは、よほどのそういうプロフェッショナルな方がいらして初めて成り立つと思うのです。なので、ここまで盛り込んでいいのかということが、まず疑問。

それともう一つは、次の、白井らしい環境を活かすまちなのですけれども、これは質問なのですが、私、Y o u T u b eで塙さんっていらっしゃいますよね、漫才協会の。その方が、この辺御出身で、Y o u T u b eでそういう、ケーブルテレビでやっているのかしら。それで白井を訪れている。それもニュータウンじゃなくて、全然足を踏み入れたことのないようなところを訪れていて、こういうところがあるのかと思ったのですが。

その中ですごく疑問だったのは、今のこの中で、農業従事者が減っているというのがありましたが、それと関係するのでしょうか。どうなんだろう。白井、西白井の上になるのかな。調べてみたのですけれども、柏と隣接しています。

○委員 富塚ですか。

○委員 ごめんなさい、そういうところに行っていて、全くニュータウンとかけ離れたところだったのですが、昔はそこに商店街があったというお話をなさっていて、今も幾つか残っているらしいのです。

そこで疑問が湧いたのが、どうして昔に、商店街もあるぐらい栄えていたところが、今は閑散としてしまったのだろうか。それはいわゆる平均的な、人口がどんどん減っているということに関係するのか、それとも、何かしら白井の事情があるのかということをお伺いしたいなど。この2点をお伺いしたいのですが。

それこそ、私はニュータウンしか知らないけれども、ニュータウン以外の敷地、人口はさて置き、敷地はとても広大なので、その融合というのがとても大事なことだと思うのです。ニュータウンのことを考えるだけじゃなくて、歴史とこれからの白井をつながたいので、その辺をすごく興味を持ったということです。

○副会長 多分、さっきの子供の関係のお話して下さったじゃないですか。私もそれ手法をするには、それを聞く職員の基準、技術とかソーシャルワーク力がすごく必要だとは思っているのですけれども、恐らくこれって、こども基本法に子供の意見を聞くというのがあって、それをまちづくりに生かしましょうという流れなのかなというふうに考えたのです。それで大丈夫でしょうか。そんな感じですか。それには、いろいろな機会とか聴収の仕方とかは、それは技術力が必要じゃないかなと私も思うのですけれども。

○事務局 いろいろな質問ありましたので、少し整理しながらお話しします。富塚の商店街の話も後でしますけれども。

まず、ワーキングキッズアドベンチャーの話なのですが、これは既にコミュニティセンター、ちょうどその辺にあるセンターがあるのです。これ、いわゆる出張所はもうなくなっているのですけれども、市の施設で、そこを管理しているところが、まず最初に自主事業、自分たちの事業として、職員じゃなくて委託しているところが、職業体験の場ということで、例えばいろいろな警察とか消防とか、そういう人たちを呼んで、制服を着て、こんな仕事をやるんだよというのを実際にやってもらうような取組をやっているのがあるのです。それを市の今度、事業として、消防、警察もそうなのなのですが、それ以外に、市と官民連携という形で、いろいろな事業者さんと提携、協定を締結しているのがあるのです。例えばコカ・コーラさんとか、それこそダイハツ自動車さんとか、そういう方たち、ほかにもいっぱいいるんですが、そういった事業者に協力してもらいながら、例えばダイハツさんだと、自動車整備の経験をするとかということは、もう既にふるさと祭りで行っていたりするのです。そういうものを一つの会場にできれば寄せて、子供たちの経験の場という形のものをつくっていただければいいなという取組の案です。一つは。

新たな挑戦提案事業、子どものアイディア実践事業と、それぞれ別々の事業で、新たな挑戦提案事業というのは、市民参加という視点から、市民の方々から、こういう事業をやったらどうかなという提案制度をとってみようかというのが一つ。

もう一つ、子供のアイディア実践事業というのは、まさにおっしゃってくれたように、こども基本法の改正というのがありますけれども、白井市では、全学校でスクールサミット、よく御存じかと思いますが、スクールサミットといって、それぞれ各学校の特定の学年の中って学校によって違うのですけれども、一つのテーマを決めて、自分たちで研究をしていくのです。それを年1回、文化センターで発表会みたいなことをやるのです。その中で子供たちがいろいろな提案をしてくれるのです。こういうことだったり、SDGsの考え方をやってみたりとか。

以前、自分が衝撃を受けたのは、白井に人を呼ぶために、水族館を造ったらどうかというような子供の意見があったりしたのですね。それはなかなか壮大なスケールなものなので難しいのですけれども、そういうものを子供たちが提案しているものがあるので、そういうものを聞き入れる場というのをスクールサミットになるのか、別の機会なのか、それを行っていかうと。実際に市だけではなくて、先ほど言った官民連携の視点から、業者さんたちにも子供の意見を聞いてもらって、その提案のよしあしということではないのですけれども、いろいろとこういうアイデアいいよねみたいなことを何か提案できたら、お互いの提案できたらいいなということを考えています。あくまで今の段階では、まだ想定している段階なので、実際できる、やるよということはないので、ただ想定しているものということで御理解いただければと思います。

さっき言った富塚商店街、富塚ってなかなか分らないですね。それこそ、白井と柏の間に富塚という、昔からあるところがあるのです。そちらに商店街がありました。

ただ、そこだけじゃなくて、白井商店街というのは、6か所、7か所ぐらい実はあるのです。ただ、今も名のつてはいるのです。名のつてはいるのですけれども、実際に商店街の体をなしているのは、駅前、富士、鎌ヶ谷のほう。木下街道沿いをずっと行くと、そちらのほうにも富士の商店街というものはあるのです。その辺が多分、大きい形をなしているものなのです。

余談も入りますけれども、そこ、木下街道というのがあるのですけれども、ここから16号に向かっていくところ。で、16号をまたいでいるところを白井商店街というのがあるのです。そこは、昔は白井銀座と言われるぐらい商店街があつて、昔といつても、私が当然生まれる前の時代ですから、すごい栄えていたということもあるのです。

富塚のほうの商店街というのは、もともとは鮮魚街道といつて、鮮魚街道と通称いうところなのですから、そういうところと行き来があつたので、昔はそういう、本当に大昔の時代の。

○委員 鮮魚は、どこから運ばれてくるのですか。

○委員 布佐のほうです。布佐で利根川から水揚げして、陸路で江戸川のほうまで運ぶ道です。

○事務局 そうなのです。川から江戸に運ぶための街道だったのです。そういうので、そこで富塚と隣、仲という地区があるので、そこで魚を冷やす場所があつたり、一回魚揚げで運ぶので、冷やしてという中継所があつたりとかしたので、そういう名残で商店街というのがあつたのではないかと思うのです。そういう歴史とか伝統文化とか一応あるのですけれども、その中で、どうしても商店街衰退しているというのは、もう時代の流れ、後継者不足であるとか、近隣に商店とかが出てきてしまうと、どうしても弱体化していくところ、流れとしてはあるのかなとは思いますが。

余談なので、時間、しゃべり過ぎてるところありますけれども、そういうのがあります。

○委員 でも、とてもそういう歴史は大事なもので、ありがとうございます。

○会長 ほかにいかがでしょうか。

どうぞ。

○委員 25ページの魅力的な住環境が充実するまちの施策なのですが、先ほどから何度も御指摘挙がっている、この市街化区域の新築戸数という指標は、またちょっと再計画されたほうがいいかなとは、いろいろ意見出ていたと思うのですが。

ただ、すごく意気込みとして評価したいのは、何はなくとも外から住民を呼び込むには、住宅ハードが整備されないことには呼び込めない、住宅ハードの整備に対して、今、委員からもお話がありましたが、自治体としてどこまでやれるのか、市がどこまでやれる

のかという問題はあるにしても、指標として一つ、人口を呼び込むための住宅インフラ、住宅ハードを増やすというのをちゃんと目標に入れているという意気込みは、すごく感動を受けております。

ただ、そうはいっても、じゃあこの指標が、本当に新築だけじゃなくて、中古も含めて、空き家の活用も含めて、いわゆる不動産市場、住宅市場に物件を流通させることができるのか。それが市の取組によって行った流通なんだよというのが多分、大事だと思うのです。その辺が指標というか、検討するのは一つかなと思うのです。単に新しい物件が、ここに一つ引っ越せる物件空きましたというのは、単にそれ、よそのところに引っ越していったっただけじゃないという話になってしまうので、なかなか単に、ぽこぽこと空き家ができたり、マンションに空き室ができたというだけだと指標にならないので。

そうすると、逆に、今のユーカリが丘の例も出ましたけれども、次世代へつなぐ循環、いわゆる循環型。実際つなぐというのは、そもそものこれまでの骨子とかでもキーワードにあったと思うのですけれども、これに基づいて、どう計画の練度を高めていくのか、私たちの、この壮大な目標に対して、市がどんな取組を具体的にできるのかというのもすごく関心持っているところなので。

ただ、ここ本当に、住みたくなくなる魅力がないとしょうがないよねというのも、一丁目一番地ですけれども、同時に住める家が売り出されていないとしょうがないけれども、同時に一丁目一番地なので、ここ本当に、全ての計画の中でもトップフロントランナーになる部分だと思うので、ぜひ練度を高めていただきたいなとは思っています。

○会長 ありがとうございます。

よろしいですか。ほかには大丈夫でしょうか。

どうぞ。

○委員 あと、一つ戻って、年齢にかかわらず学べるまち、誰もがチャレンジできるまちに関してなのですが、先ほどおっしゃったように、ここの部分に絡む部分のハブとして、小学校区まちづくり協議会を挙げていらっしゃるだったので、やっぱりこれ本当にその他の、この六つのうちの③に当たるここの施策の部分、提案も、このプラットフォーム入れるのは、②で述べられていた地域の人たちが交流できる拠点があることで、そこにこういった取組をインストールできるということで、すごく横横で施策がつながっているのだなとすごく感じましたし、1の部分で、子育て世代たち、教育インフラ、教育というソフトの拡充という部分でも、今、文部科学省のほうでコミュニティスクールを推進するところで、県のほうも、もうほぼほぼ全ての学校にコミュニティスクールを入れていこうということで、白井でも今年度、全14の小中学校全てでコミュニティスクールは立ち上がってきているのですけれども、このコミュニティスクールの骨子たる部分も、地域と学校がつながっていくこと、地域の人たちも子供たちの教育に関わっていくことで、それは、文科省で言うておられる地域学校協働本部となっていますけれども、これ多分、まち協のこと

だよねということを経理先生方も認識されていて、そういう意味でも、まち協が立ち上がっていくかというふうな施策2、②の部分は、こっちの誰もがチャレンジできるソフトインストールする意味でも、あと、魅力ある、地域と連携した教育を行えるかという点でも全部つながっているのかなというふうに感じました。

それこそ、そういった教育が学校でできていけば、今お話ありましたけれども、鮮魚街道の歴史を知っていますかとか、富塚は昔、鮮魚街道で魚、富塚銀座があったのですよというぐらいのお話とかも、子供たちのほうが詳しくなっていたりして、親に教えてくれるようなこともあるかもしれませんし、そういうのがいいのかなと感じました。

○会長 全くそのとおりだと思いますので、ぜひ、今後の作業の着眼点として加えていただければと思います。

あと、私のほうから申し上げたいのは、少し白井の中にとどまり過ぎかなという印象があつて。例えば、先ほどの主体的な教育というの、いろいろな形で学びの場を子供たちに提供するというのは、全くこのとおりでいいと思うのですが、そこで学んだ子供たちは、多分、もっとあちこちに出ていく。例えばそれこそ、ここでいろいろ学んだら今度、海外に出ていくとか、それぐらいの広がりの中で、とにかく新たなことにチャレンジしていく、こういうことをやりたいのだというのだったら、もっと語学を学ぶとか、何らかのスキルを学ぶ。これを学ぶのだったら、海外のことを知るきっかけで、例えば、海外の都市でもどこでもいいですけども、白井は姉妹都市とかそういうのはあるのではたつけない。そういったところがあれば、本当はそういうところと連携して、例えば、ホームステイの機会を与えとか、そういうふうな広がりをつくっていくというのが今後大事になってくると思いますので、白井の中でチャレンジする機会がとどまるというふうにはしないほうがいいかなというのが一つ。

それからもう一つは、これ前から申し上げていることでもあるのですが、景観と農業というものの若干の中途半端さというのがやっぱり否めなくて。

これは、前の総合計画のときも申し上げましたけれども、例えば、農業というの、どういう農業にしていくのかというのは、もちろん後継者育成だとか、いろいろな、あるいはスマート農業的な形で新たなスタイルということがうたわれていますけれども、これこそやっぱり広げ過ぎのような部分があつて、本気で白井の農業の今後の可能性を探るのだったら、もう少し焦点を絞りながらやっていく。例えば、実際によっては、一次農業としての拡大は難しいから、六次化でいくのだというふうにやっているところもあれば、あるいは、そういう量的な広がりには難しいから、例えば、それこそ市外のいろいろな人たちを招いて農体験みたいなものをする。そういう関係人口的な意味で農業を生かすというふうな方向にどんどんシフトさせていくとかいう、そこら辺、どこに重きがあるのかなというのがちょっと見えづらいところがあるのです。だから、そこら辺もう少し焦点を定めていったほうがいいかなというふうに思います。

それから、自然とか緑との触れ合いというのも、まさに憩いの場をつくっていくというふうなものとか、美化、景観を強化していく、そういう場を膨らませてくということはいいと思うのですけれども、これもそれこそ、そういう農体験と同じように、自然体験みたいなことを考えていくのであれば、市内外のつながり、連携、関係性というものをもっと強化していくとか、あるいは、白井はやっぱり半分都市部、半分農村地域というふうなところがあるので、例えば、千葉県内でいうと、山武とかいすみのほうに行くと、まさに農業体験とか、あるいは緑との触れ合いで、そういう緑を通じた生活スタイルみたいなものを学ぶとか、体験するという、そういう新たなというか、場合によっては、かつてなのかもしれませんけれども、そういう生活スタイルみたいなものを学べるのだ、体験できるのだというふうな、そういうふうな、この白井の農とか緑というものを生かしていくというふうな方向にいくのか。ここら辺も、美化ということはいいのだけれども、そこにとどまっちゃっていて、それを今後どうしていくのかというのがなかなか見えないというところもありますので、そこら辺も今後の検討課題の中に加えていただけたらなというふうには思います。

○事務局 **【資料1】3. 目指すまちの実現に向けた施策の柱と施策のうち「5 新しい産業が栄えるまち」「6 災害に強いまち」(P. III-27～III-39)を説明**

○会長 ありがとうございました。

今の5番目と6番目について、御質問、御意見をお願いしたいと思います。

どうぞ。

○委員 32ページの5-2-1、土地利用の見直し、新たなにぎわいの創出で、施策目標として企業誘致件数というふうに書かれていますけれども、これだと社長さん1人が、創業者、スタートアップも1なら、巨大データセンターを誘致してきても1件なので、多分これ誘致する目的というか、新たな企業を白井で立ち上げてもらう目的は、雇用か税収だと思うので、雇用や税収のほうを指標にしたほうが、しっくりくるのかなと感じました。

以上です。

○事務局 ありがとうございます。

企業誘致の視点としましては、おっしゃるとおり、数ではなくて質とっていいですかね、そういった部分があると思いますので、これが目標数値にふさわしいかというのは、また再度検討させていただければと思います。

○会長 ほかにいかがでしょうか。

どうぞ。

○委員 誤字なのですが、消防団の再編事業のところ、現在の消防署の署が所になっているのですけれども、これ違いますよね。

○会長 それは修正をお願いしたいと思います。

ほかにいかがでしょうか。

どうぞ。

○副会長 目標の6-2のうち、自助・共助・公助によって対応できる体制づくりの施策の目標なのですが、地域防災訓練の実施数というのは、それも多分、指標にはなるかと思うのですが、例えば、訓練の実施数だけでなく、訓練をするための研修とか話し合い、講義を聞くとか、何かそういうようなものも指標に入れてもいいんじゃないかなというのを感じたのが1点です。

6-2-2については、参加率というのはすごく大事なことで、さっき見たら6%か、たしか書いてあったので、この参加率を高めるというのは、公助に役立つかなとは思いますが、逆に、さっきの地域防災が、訓練がなぜ大事なのかとか、さっきおっしゃったDMATが来るまでに、地域の人たちで自分たちの命を守ることということを伝える機会をつくって、それもカウントに何かできたりしたらいいんじゃないか。あとは、その参加率なんかもできたらいいんじゃないかなというふうに思いました。

以上です。

○事務局 ありがとうございます。

こちらの防災の担当の課とかと調整しているので、そういった研修をやる回数ですとか、そういったいい指標がないかというのは相談して、精査して、よりバージョンアップしたいと思いましたが、そういった方向で調整させていただければと思います。

○副会長 ありがとうございます。

○会長 ほかにいかがでしょうか。

私のほうから、施策の5-2-2で、多様なライフスタイルに合った多様な働き方の支援というのがあって、創業者数とか就業率といったものが上がっていますけれども、これも、どれくらいの質感とレベル感でいくのかなというのがある。これも前からうたわれてはいるのですが、多分、なかなか実数化していないという印象を持っています。

だからこの辺、例えば、多様な働き方ということであれば、どういう働き方があるのかということをもっと研究開発するような、そういう場をつくっていくという、企業にも参加してもらってということなのか、それとも、例えば千葉大学は、この春から、アントレプレナーシップセンターというものが立ち上がって、これ要するに起業する人たち、それは社会人であろうと学生であろうと、そういうアントレ的な、新たにいろいろななりわいをおこしていきたいという人たちが学べるようなセンターというのが立ち上がって、それは同時に、産学連携の延長線上でもあるのですけれども、いろいろな学びの場、あるいはスキルというものを共有していく、そういうふうな動きも出てきたりもしているのですけれども。要するに、そういった高度な学びの場というものをどういうふうにつくっていくのか、あるいは、様々な機関と連携を図っていくのかというあたりも本格的にやっていか

ないと、中途半端に学びの場というのをつくっても、多分、人が来ないと。というふうなことも予想されるので、そういった場をいずれにしても、もっと本格的につくっていくということが必要かなというふうには思います。

あと、新しい産業というものも、何を想定しているのかというあたりも、もうちょっと詰める必要があるところですので、これはまだ、これだけだと漠然としているところもありますけれども、もう少し詰めていく必要があるかなということ。

そして、いずれしても、企業誘致というのは、多分、一昔前の発想という部分があって、なかなか今、企業はほとんど外に向いちゃっているというところもあって、なかなか来てくれないというところもあるし、逆に行政とすれば、企業連携を図っていくというのは大事なわけけれども、どういう連携を図りたいのかという部分が、企業の側からすると見えないという実情があるのです。ただ場所だけ提供して、企業誘致だったら進むわけもないのであって、そういうふうなトータルなまちづくりの中で、どういう企業に来てもらいたいのかとか、どういう企業ともっと連携を図っていききたいのかというふうな具体的なものが見えてこない、なかなか企業との連携とか、企業に来てもらうとかいうふうなものは難しい部分もあるので、これは新しい産業というよりも、企業との連携というのをどう図っていくのかというあたりは、もう少し戦略的に位置づけていく必要があるのかなというふうに思います。

前回もちょっと審議会で言いましたけれども、例えば、子育てというところに力を入れてくというのであれば、子育てということについて、いろいろなスキルを持っている、あるいは、いろいろなネットワークを持っているというところに、多分、行政として営業をかけていかなきゃ駄目だと思います。待っていたって来ないですから。だから、街によっては、どんどん営業専門の部署ができるぐらい、そういう働きかけというのは、どんどんやっていくと。まして今、こういう地方創生なんて動きの中で、そういう流れというのは大分加速してきていると。トータルな国の動きがいいかどうかはちょっと置いておくとして、いずれにしても、自治体としてどういうふうな姿勢で臨むのかといったときに、うちの街では、こういう子育て環境をつくりたいのだ、だから、もっとこういう部分で協力してくれないかということをどんどんアプローチしていくというふうな姿勢を持っていかないと、企業は待ってても来ないというふうに考えたほうがいいと思いますので、その辺の戦略もどう立てていくべきかということも詰めていっていただけたらなというふうに思います。

ほかによろしければ。

どうぞ。

○委員 今、会長がおっしゃったこと、本当に企業というのは、なかなか誘致は難しいという。ですから、それはどこでも狙っている、大きな発想の転換というのが本当に必要だというのは、前々回からずっと思っております。

それと、今、アントレプレナーのお話が出たのですけれども、この5-2-2のそのときにやはり思ったことなのですから、それと、若い世代が定住したくなるまち、前からそこに引っかかってはいるわけなのですから、それで結婚生活をして、子供を育ててという、また別だと思うのです。これは、起業なさる方は、やはり若い世代だと思うのです。その若い世代の方がこの白井を選ぶということは、これもまた重要なことだと思うのです。活性化させる上で。これとまた定住化は別問題だと思うのです。ただ、活気が出るのは間違いないですし、その方々のいろいろなアイデアで街自体に魅力も増すと思うので、それを、若い世代の定住というものを、そこで家庭を持つ、それだけに特化しないで、やはりこの辺を連携させたほうがいいのではないかと考えています。

○会長 ありがとうございます。

ほかによろしいでしょうか。

どうぞ。

○委員 資料のⅢ-34の目標3、6-1の災害に強い施設・設備で備えるまちといって、インフラの老朽化対応と思うのですけれども、これ多分、公共施設とかインフラを考えるときに、全ての公共施設とかインフラをずっと維持管理できるか、行政としてというのがあって。例えば、公共施設がある程度集約化していくとか、あるいは、道路とか橋とかも全て、維持管理がもう運営のコスト的に無理なので足らないとか、そういうことも考えなきゃいけないと思うのです、多分、今の時代。という意味で、そういうようなことまでは、これ考えていないのですかね。ただ単に、今までのインフラとか公共施設をリプレースしていくというだけなのか、もうちょっと変えていくということまで踏み込まれているのか。そのあたりよく分からなかったのですけれども。

○事務局 ありがとうございます。

道路とか、そういったインフラについては、市で整備した部分については、必要に応じた災害等が起きないように維持管理というのを求められている部分はあると思うのですけれども、公共施設とかそういった部分については、建てられてから三、四十年たっているというところがあって、その当時と現在のニーズというのは、当然変わってきている。そういった視点は、行政としても持ち合わせていますので、そういったストックマネジメント、そういったものを考えて、最適な整備、そういったものは視点に入れつつ事業推進をしていかなきゃいけないというのは、視点としてあります。

○委員 ありがとうございます。

多分これ大項目が災害に強いまちという、流れの中で出ているので、多分、道路とかそういったインフラのことを主におっしゃられていると思うのですけれども、同時に、さっきの公共施設を全て維持できるのかという行政系的な視点でも、本当は。それが目指すまちにはないということなのですかね。それは、お金は借金つくっても何とかする。

○事務局 構想のほうに、重要なテーマの中で、公共施設、そういったものをストックマ

ネジメントみたいな部分が掲げていますので、そちらが、おっしゃられたようなことは本当は視点として反映されていないといけない部分なのかなとも思いますので、こちらの現況の説明のところとかで、そういった部分が読み取れる、そういったものの表記の工夫等は修正の参考にさせていただければと思います。

○委員 よろしくをお願いします。

○会長 ありがとうございます。

ほかにはよろしいでしょうか。

あと、もし全体に関することで何かあれば、併せてお願いできればと思いますが、よろしいでしょうか。次回も、さらにまた議論を続けるということになるかと思うので、引き続きお気づきの点があれば、次回の会議までの間にでも、もし何かあれば事務局のほうにいろいろ御意見をお寄せいただければと思います。

一言だけ最後申し上げると、多分、移住という言い方されているけれども、移住というふうになっちゃうと、来てくれる層は限られるのですよね。だから多分、発想はもっと立体的にしていいいわけで。例えばよく言われるのは、2地域居住だとか、あるいは、週末は白井に来るよとかというふうな、そういう全部 100 じゃなくって、もうちょっと複眼的なというか、そういうふうな発想というのは、すごく大事かなというふうに思いますし。

働くということも、なかなか白井で働くというのは難しいかもしれないけれども、本業は都内で仕事をするけれども、副業的に白井で何かいろいろなものにチャレンジしてみるとか、そういうふうな、並行して複眼的に何かできるような発想というものをいろいろな要所要所に詰め込んでいかないと、囲い込みだったり、二者択一というふうな発想だと、やっぱり資源確保という点からすると、限られちゃうところもありますので、そういう意味では、いろいろな部分で工夫を施していく必要があるのかなというのは、さっき申し上げていたと思います。

○事務局 **【資料1】4. 施策展開にあたっての留意点 (P. III-40～III-42) を説明**

○会長 最後、御説明いただいた今後の進め方というか、留意点という部分で、もし何か御質問、御意見あれば、お願いしたいと思います。

新たな財源の創出というのは、多分、今後の大きな課題になっていくと思いますので、こういった視点でいいと思いますし、前回も申し上げましたけれども、やっぱりプロジェクトチームをどんどん立ち上げながら様々な資金獲得に当たっていくと。これはもちろん行政としても、様々な補助金なり助成金なり何なりということを取りにいくというのもありますし、民間財団が公募しているようなものがあって、そういったところ、例えば、市内で活動している団体の方々が、そういった補助金なり何なりというものを取りにいくと

いう。例えば、もう間もなく締切になりますけれども、例えば豊田財団なんかのところだったら、今年度の募集テーマというのは地域自治なのです。地域の中でいろいろな活動団体が連携をして、まさにこのまち協のような、そういった活動をする、プロジェクトチームにも数百万、何年間かで数千万と、そういう規模感の補助金というものを出していくという。これ、白井の市民活動団体がそういったところでどんどんアプローチするような環境をつくっていかないと、これが市民活動センターがやるべき役割なのです。多分、今、そういう橋渡しは全然できてないんじゃないですかね。だから、もっとどんどんアプライしていけるような。

今、公募型で増えているのは、それこそ行政と市民、地域との連携プロジェクトチーム。そういったプロジェクトチームにどんどん応募してもらいたいというふうな事業が本当増えているのです、今。なので、そういう意味では、もっとそういうプロジェクトチームを、役所内では横断的につくって、関係するような団体にどんどん巻き込みを図って、企業でも巻き込みを図って、そういうチームをどんどん、もう白井で幾つも並行して進んでいると。そういった公募事業というのは、10件、20件応募して、1個与えればいいかなぐらいの多分、感覚でよくて、だから、どんどん常に攻めの姿勢でいくという部分がやっぱり必要なのです。だから、そういうふうな取りに行く、そういう情報も行政はどんどん発信する。

これ、半分嫌な話なのですけれども、千葉大学は、とにかく教員に金集めてこいというメールが毎日のように来るのです。どどこでこういう公募事業やって、こういう事業に応募すると100万円の研究費が来ますよとか、こういうのが毎日のようにメールで来るのです。だから、それはいかがかと思うのだけれども、世の中の的にはそういう流れになっちゃっていると。だから、半ば面従腹背でも何でもいいので、とにかくやりたいことがあるのだったら取りに行くという姿勢は、やっぱり必要だと思いますから、そういう意味では、そういうプロジェクトチームが白井にどんどん立ち上がって、取りに行く。

これはお金だけでなく、取りに行くということは、コンセプトを固めるということだから、じゃあどうしようか、ああしようかという議論が、立場を超えた形で議論として蓄積されていくのです。だから、今回これでやってみよう、だったらちょっと軌道修正して、これで今度アプライしてみようという、そういうふうな動きがどんどん出てくるということが大事かと思いますので、そういう連携づくりというのは、そういう作業をやることでできるということもいろいろありますから、そういうふうなことも念頭に置きながら今後の動きも考えていただけたら。これ、最後に申し上げたいと思います。

時間が超過してしまいましたけれども、今日の段階で、もし何か皆さんほうからあればお願いしたいと思いますが、よろしいでしょうか。お気づきの点がありましたら、事務局のほうに、個別にメールとかでもどんどん御意見をお寄せいただければと思いますし、また、次回の会議でも引き続き議論は重ねたいと思います。

じゃあ、議題の一つ目は以上とさせていただいて、(2) その他ということで、事務局からお願いいたします。

○事務局 本日、冒頭に御説明しました年間の開催日程が若干修正がありまして、こちらの紙に書かせていただいているのですけれども、次回の審議会は変更なく、8月の12日、火曜日の同じ時間で、14時から。場所も、こちらで行う予定でございます。3回目の審議会なののですけれども、こちら日付、10月の28日とさせていただいたのですけれども、10月の21日、火曜日の時間帯も9時半からとさせていただきます。

また、いつもここでやらせていただいたのですけれども、場所が変更となりまして、本庁舎の今度は4階の第2委員会室、こちらで開催する予定ですので、お間違えないようお願いいたします。

以上となります。

○会長 一応、日程そのような形になっているということで御確認をお願いしたいと思います。

それでは、予定されていたことについては以上となりますので、本日の第1回白井市総合計画審議会は、これをもって閉会とさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。